

第 63 回 コンパス薬局 スキルアップ勉強会

『オキシコンチン錠使用時におけるオキノーム散のレスキュー使用方法』

塩野義製薬（株）様

2016. 11. 24

記録：佐藤直富実

参加者：佐藤（直）、佐藤（杏）、川原、水谷、生越、佐藤（綾）、阿部、梅津、伊藤、（敬称略）

在宅医療が進む中で、末期がん患者の疼痛コントロールを在宅で行う事例も増えている。薬局薬剤師もそのコントロールの為の知識を再確認しておく必要性を感じ、本勉強会を企画した。本勉強会は、緩和医療の定義、癌性疼痛の治療 5 原則、WHO 三段階除痛ラダーの再確認、及び具体的な例としてオキノーム散にレスキュー・ドーズとしてオプソ内服液を使用する方法を学んだ。

＝緩和医療の定義（日本緩和医療学会）＝

緩和医療は、生命を脅かすような疾患、特に治癒が困難な疾患を持つ患者及びその家族の QOL 向上のため、病気の全経過にわたって医療・福祉及びその他様々な職種が連携して行われる医療である。緩和医療は、患者と家族が可能な限り人間らしく快適な生活を送れるように提供され、その要件は以下の 5 項目である。

- (1) 痛みやその他の苦痛となる症状を緩和する。
- (2) 人が生きることを尊重し、誰にも例外なく訪れる『死への過程』に敬意を払う。
- (3) 患者・家族の望まない無理な延命や意図的に死を招くことをしない。
- (4) 精神的・社会的な援助やスピリチュアルケアを提供し、最後まで患者が人生を積極的に生きていけるように支える。
- (5) 病気の療養中から死別した後に至るまで、家族が様々な困難に対処できるように支える。

＝癌性疼痛の治療 5 原則（WHO）＝

- (1) できるだけ経口投与とする (by mouth)。

がんの痛みを使用する鎮痛薬は、簡便、用量調節が容易、安定した血中濃度が得られる経口投与とすることが望ましい。しかし、嘔気や嘔吐、嚥下困難、消化管閉塞などの患者には、直腸内投与（坐剤）、持続皮下注、持続静注、経皮投与（貼付剤）などを検討する。

- (2) 時刻を決めて規則正しく投与する (by the clock)。

持続する痛みには、時刻を決めた一定の使用間隔で投与する。通常、がんによる疼痛は持続的で、鎮痛薬の血中濃度が低下すると痛みが生じてくる。従って鎮痛薬の頓用は行うべきではない。また突出痛には、レスキュー・ドーズを行う。鎮痛薬の定期投与とレスキュー・ドーズを設定し、患者に使用を促す。

(3) 効力の順に鎮痛薬を選ぶ（「WHO 三段階除痛ラダー」に沿って投与する）（by the ladder）。

第1段階：非オピオイド（アスピリン、アセトアミノフェン等）±鎮痛補助薬

第2段階：弱オピオイド（コデイン、トラマドール等）±非オピオイド±鎮痛補助薬

第3段階：強オピオイド（モルヒネ、フェンタニル、オキシコドン等）±非オピオイド±鎮痛補助薬

(4) 個々の患者の痛みが消失する量を求めながら用いる（for the individual）。

鎮痛薬の適量は、効果判定を繰り返して調整する。その際、強オピオイドには標準投与量は設定されていない。適切なオピオイドの投与量は、痛みが消え、かつ副作用が問題とならない量である。レスキュー・ドーズを使用しながら、十分な緩和が得られる定期投与量（1日定期投与量とレスキュー・ドーズ1回量）を決定する。

(5) 4原則を守ったうえで細かな点にも注意する（with attention to detail）。

痛みの原因と鎮痛薬の作用機序について患者に説明する。時刻を決めて規則正しく鎮痛薬を用いることの大切さの説明と、予想される副作用と予防策についての説明を行う。また、治療による患者の痛みの変化を観察する。痛みが変化したり、異なる痛みが出現したりする場合は、再度検討し、効果と副作用の評価と判定を行い、適宜、適切な鎮痛薬への変更や鎮痛補助薬の追加を検討する。

=オキノーム散=

以下、添付文書参照

http://www.info.pmda.go.jp/go/pack/8119002B2023_1_06/

=レスキュー・ドーズの使い方=

オキシコンチン錠とオキノーム散の基本的な使い方

オキシコンチン錠 1日投与量	オキノーム散 1回投与量
10mg	2.5mg
20mg	5mg
40mg	5～10mg
60mg	10mg
80mg	10～20mg
120mg	20mg

・オキノーム散の1日使用回数の制限はないが、追加使用する場合は前回のオキノーム散又はオキシコンチン錠の投与から1時間以上の間隔を空ける。

・レスキュー・ドーズが1日2回以上必要だった時は、次の日からオキシコンチン錠の増量を検討する。

・オキシコンチン錠の増量方法には、レスキュー・ドーズで使用したオキノーム散の全量をオキシコンチン錠に加えていく方法や、オキシコンチン錠を段階的に増量していく方法等がある。

【考察】

今回の勉強会で、医療用麻薬の使い方の復讐をすることができた。

痛みのコントロールは患者及びの家族の QOL 向上に大きな要因をきたす。適切な鎮痛薬の選択と、その用量設定が大切であることを改めて実感した。処方せんがきた時に、それが疼痛コントロールとして適切であるか、患者の状態を想像しながら調剤できる様になりたい。

以上